

# 田鶴浜高校だより 令和2年 2月発行 立春号



〒929-2195 石川県七尾市上野ヶ丘町 59 番地

☎ 0767-68-3116 FAX 0767-68-2351

<http://cms1.ishikawa-c.ed.jp/~taturh/NC2/htdocs/>

## 1 衛生看護科より 田鶴浜高校衛生看護科から看護師になると、大学の看護学科へ進学して看護師になる場合の違いをお知らせします。

就職状況・進学状況、就職後の給与・キャリアアップ等、本校卒と大学卒では全く差はありません。病院の管理職の方にお聞きすると「病院就職後の実績を評価するので、どこの学校を卒業したかは関係ない」とのことです。田鶴浜高校の卒業生は2年早く二十歳で国家試験を受験できます。看護師国家試験8年連続全員合格は、全国トップクラスです。



## 2 健康福祉科より 健康福祉科の卒業生が医療系の資格「看護師」、「理学療法士・作業療法士」として働いている理由をお知らせします。

高校1年生から、医療に関係の授業を基礎から受けて介護福祉士国家資格を取得します。卒業後に、大学や専門学校へ進学した生徒によると、医療の知識が身についているので6年間でダブルライセンスを取得できたそうです。教育系学部に進学した卒業生は、県内外で福祉や特別支援学校の先生として活躍している先輩もいます。ちなみに、衛生看護科からも教員（看護科教諭・養護教諭）になることができます。本校衛生看護科では、4人の先生が本校出身です。



## 3 手話部より 石川県では、平成30年に「手話言語条例」が制定され、手話に対する注目が高まっています。手話部の活動をお知らせします。

本校には、県内で唯一手話部があり、各種大会やイベントなどでの発表を通して、手話の習得・普及を目指して活動しています。全国手話パフォーマンス甲子園には、6年連続全国大会に出場し、第1回大会全国優勝・第2回と第6回は大会審査員特別賞・第4回大会鳥取県聴覚障害者協会賞を受賞しています。手話部は施設へ訪問し、利用者の皆様と手話歌による交流も行っています。在校生の中には、手話部にあこがれて、本校に入学した生徒もいます。（現在部員は29名、衛生看護科も健康福祉科もどちらの生徒もいます）



いしかわ介護フェスタ（手話歌）

## 4 言語活動の充実について “田鶴浜高校の学び”として、今年度は「言語活動の充実」を重点項目に掲げて、様々な取組が行われています。七尾市内中学校出身生徒の入賞結果を紹介します。（出身中学校）

### ○第39回折口父子記念短歌大会

秀逸 3年 横山 絢音（中島中）  
佳作 3年 伊藤 開人（七尾東部中）他2名

### ○第3回石川県小中高生短歌大会

最優秀学校賞 石川県立田鶴浜高等学校  
準特選 1名  
佳作 2年 相田 美和（七尾中）他1名

### ○読書感想文コンクール自由読書の部

優良 3年 守友 ゆう（朝日中）他2名

### ○男女共同参画に関する川柳の作品

優秀賞 1名 入選 2名

### ○第15回「新聞読んで」感想文コンクール（裏面で紹介）

最優秀賞 2年 桶谷 礼愛  
優秀賞 2年 石川 菜友（七尾中）



### ○第26回新聞配達に関するエッセーコンテスト

入選 1名

### ○第39回 児童・生徒俳句大会

特選 1名

佳作 1年 佐野 夢佳（七尾東部中）  
3年 石本 雅（御祓中）他1名

### ○令和元年度坪野哲久文学奨励賞

短歌の部 金賞、銅賞、佳作各1名  
俳句の部 銅賞1名、佳作2名

### ○和元年度 家庭の日「川柳コンクール」

佳作 3名

### ○白山ふるさと文学賞

白山市ジュニア文芸賞 千代女部門  
高校生の部 特選 1名



# 最優秀

今から約3年前に起こったこの事件を、今でもよく覚えています。当時中学生だった私は、19人も尊い命が奪われた事に胸を痛めるのと同時に「障害者は不必要」「死んだ方がいい」という犯人の考えに衝撃を受けました。あれから3年経った今、この記事を書きかけに相模原障害者施設殺傷事件について考えてみると、犯人のもつ「障害者差別」の考えは、私達の心の中に、この社会の根っこの部分に密かにあるのではないかとほっとしました。それは、私が中学校の頃からあったように思います。クラスにいた障がいを持った子は周りからかわられていました。幼い子供の社会でも差別というものがあたり前にあることを肌で感じて、そんな社会の一員であることにひどく嫌悪感を募らせていました。しかし、そんな私もやっぱり障がいのある人を見て「かわいそう」「五体満足で幸せだ」なんて思ってしまうのです。



## 健常と障がいの境界線

田鶴浜高2年 桶谷 礼愛

な体になるまで人の事なんて考えても来なかった。だからこの体になって良かったと思うています。有難さが分かるようになり「私はこの言葉に胸が熱くなり、涙が零れないようにただただ微笑み頷くしかできませんでした。障がいを持ちながらも真々直ぐ生きる彼は眩しい位に輝いていました。彼の言葉は私に障がいを持つことで見える世界があることを教えてくれました。きっと健常者と障がいのある人の間には優劣も境界線もないのだと私は信じています。それを作っているのは、私たちひとりひとりなのです。その結果が、こんなにも痛ましい事件を許してしまう社会を造ってしまったのではないだろうかと考えさせられます。障がいのある人と関わる事が多いこの道を選んだからこそ、彼の言葉を何度も思い出し、同じ立場に立って寄り添う姿勢を忘れないでいたいのです。私一人が変わったところで、今もなお「障害者差別」の姿勢を崩さない犯人やこの社会を変える事は難しいかもしれません。私の気持ちや、援助の姿勢でこれに関わる、一人でも多くの人の心に届くことを信じて寄り添っていきたいと思います。

「新聞読んで」感想文コンクールにおいて、応募総数 6113 点から本校生徒が「高校生の部」で**最優秀賞**と**優秀賞**に選ばれるという快挙を達成しました。ご紹介します。《北國新聞提供 令和元年11月15日(金)朝刊》

# 優秀

みなさんは人生の最期をどのように迎えたいか考えたことはありますか。今、私が一番家族に考えて欲しいのは、人生最期の迎え方です。老衰が理想的な形ですが、みんながみんなそのような形で死を迎えるわけではありません。もし、家族の病態が急変し、延命治療をするかしないか判断しろと言われても、家族と何も話していなかったら、自分の意思だけで決めなければなりません。そうなる、本当にそれで良かったのかと後悔が生まれることがあります。自分の最期は自分で決めるべきだと私は思います。だから、みなさんも自分の最期を少しでも考えて、家族と話し合ってみてはどうですか。後悔を少しでも減らすことができると思います。

## 死と医療の結びつき

田鶴浜高2年 石川 菜友



と診断された女性は、歩行や会話が困難となり、医師からは「やがて胃瘻と人工呼吸器が必要になる」と宣告されました。自殺未遂を繰り返す本人から、「安楽死が唯一の希望の光」だと聞かされた家族は、自問自答しながら選択に寄り添わざるを得なくなりました。そして、家族はスイスでの最期の瞬間に立ち会いました。薬を入れると5分以内ですぐに永遠の眠りにつきました。それを見届けた家族の思いに私は胸が痛くなりました。この番組を見たのをきっかけに、私も『死』と向き合う患者さんとその家族の支えになりたいと思えました。まずは自分の家族から、人生の最期の在り方について考えようと思えました。

人生最期を迎えるには、死生観を持つことが大切だと気がつきました。死生観とは、生きることと死ぬことに対する考え方のことをいいます。死生観を持つことで、死について考えて準備することができ、自分にとってより良い最期を迎えられたり、死に対する不安や恐怖心を軽減させ、『死』のイメージが変わり、最期を考えやすくなったりするのではないかと思います。『死』に向かって生きている私たち、必ず誰にでも『死』がやってきます。家族と納得できる形で話し合い、後悔のないよう生きることが大切だと思います。